

05・最後の日、駐車場、まだ離れたくない

『04・非公認の日々』の翌日。

とある年の秋。十月下旬の月曜日、二十二時すぎ。

日本のある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は雨。外の気温は八度。

ひとときわ寒い夜になった。

場所は『ガーデン逢瀬』の駐車場。

今日も主人公はイヴを迎えに行き、今日もおおむね同じ時刻に、一緒にマンションへ戻ってきた。

それはこの一か月、何度も行われてきた事だ。

だが、今日は少し、これまでと事情が違っていた。

SE1 主人公の車の環境音

【最初から流す】

【0―5秒ほどまで流しSE2に切り替える】

SE2 主人公の車が停車する音

【最初から最後まで流す】

SE3 車の環境音

【最初から最後まで流す】

【▲1 で次の環境音と切り替わる】

【前日譚トラック03で使用しているのと同じ音】

イヴ、車が停車したところで話し始める。

「【少し残念そうに。】

本当は『とても残念』だが、主人公を困らせたくない。
いつものように、比較的さらっと言うのにとどめる」

あー。もう駐車場着いちゃった」

〈主人公〉

「はは。何回も迎えに行くうちに、近道覚えちゃったからなあ」

主人公、正直なところ、イヴが残念そうにしているのが嬉しい。

主人公も同じ気持ちだからだ。

だから本当は『あつという間すぎるよね』『このまま別々に家に帰るのなんて、嫌だよね』と言いたかった。

でも、そうすれば主人公は、いよいよ『先生』の領分を越えてしまうだろう。だから、できない。

『今更何を』と思われるかもしれないが……車で一緒に帰る、最後の日である今日を機に、主人公は正しく『先生』に戻り、今後は適切な距離感でイヴに接するべきだと考えていた。たとえこの一か月で、主人公のイヴへの気持ち、大きく変わっていたとしても。

主人公がもう、イヴの事を単なる生徒だとは思えず『叶う事なら、これからも一緒に過ごしたい』と願い始めていたとしても……。

それを告白するわけにはいかない。主人公はイヴの先生だからだ。

【この一か月の出来事を思い出しながら】

何かあつという間だったね。一か月。

【複雑な面持ちで。『信じられないね』は『自分は変質者が捕まった事が信じられない』と

いう意味ではなく『先生も信じられないって思っているよね?』という意味。まだ心を整理しきれていない。

変質者が捕まった件については、心からホッとしており、嬉しい。だが、一度このような事があると、今後も簡単に警戒を解けない。そのため、不安が消えた訳ではない。

また、主人公との今後の関係が気がかり」
「なんかまだ信じられないね。変な人捕まったって」

〈主人公〉

「私も。」

一刻も早くこうなってほしいと思ってたから、すごく嬉しい。

……でも、ずっと悩まされてた分、信じきれなくて。

『本当にそう? ぬか喜びにならない?』って警戒しちやってるっていうか」

だから主人公は、口にして問題のない範囲で、自分の気持ちを話す事にした。

これがあまりにも自分らしくない事はわかっているが、今の主人公には、言えない事が多すぎる。

仮にそれらを一つでも発したら、主人公はきっと、歯止めが利かなくなる。

やはり『今更何を』という話だが……それでも、これ以上イヴに迷惑をかけるような事はしたくなかった。

「心から同意して、主人公の言葉を復唱する」
わかる。

私もすごい困らされた分、警戒解けないっていうか。

『本当に捕まったの?』を、少し怪しんでいるような口調で言う」

『本当に捕まったの?』みたいに思っちゃってる所ある。

「ここから※マークのセリフ終わりまで、昨日、学校からの連絡で判明した事を述べる」
でも、昨日学校から聞いた話だと、間違いなく、私についてきてた人だよね。

服装とか、やってる事とか、完全一致だったし。

「少し間をあけてから。これについても複雑な心境でいる。

『変質者は、自分個人に執着していたわけではなかった』という点では安心してはいる。
しかし『他にも被害者がいた』という点を考慮すると、安易に喜べない」

けど、私だけじゃなくて、この辺で気に入った女の子見つけたら、誰でも付け回してるような人だったんだね。

『『うち』は『うちの学校』の略』

うちだけじゃなくて、他の学校でも変質者情報みたいなの出てたっていうのは、びっく

りしたなあ」※

〈主人公〉

「……………」

主人公、否定も肯定もせずにイヴの言葉を聞く。

実を言うと、主人公はこの件について、イヴよりも早く、イヴよりも多くの事を知っていた。

今イヴが言った通り、近隣の学校では、変質者に関する情報共有がなされていた。

中でも主人公は、事件の関係者として、積極的に情報を集めていたからである。

それでも主人公は、昨日決定的な進展があるまでは、イヴに最低限の事だけを伝えていた。

それは、なかなか有力情報がなかったというのもあるし、いたずらにこの件を蒸し返して不安にさせたくないという気持ちもあったし……単純に、生徒に対して、未確定情報を流出させてはならないという気持ちもあったからだ。

つまり、主人公はこの件に関して『イヴは人間として信頼できるから、少しくらいなら話してもいい』などとは考えず、教師と生徒の一線を守るべきだと考え、そうしてきた。

だから他の点においても、主人公はこの方針を貫くべきなのだ。

『事件は解決したのだから、もう必要以上に一緒に過ごさない』

『生徒と先生の垣根を越えて、親しくするのはもうやめる』

そうすれば、主人公は真つ当な『先生らしさ』を取り戻せるからだ。

……でもそれは果たして、自分らしい行動だろうか？

たとえば自分らしくなくとも、主人公が心から『なりたい』と願うような人物のする行動だろうか？

仮にその選択が『先生』としては正しかったとしても、主人公は一人の人間として、そんな自分を支持できるだろうか？

『こんなにプライベートでも仲よくなつて、沢山お世話になつたけれど、事件は解決したのでさよなら。もう必要最低限しか関わりません』などという自分を、好きになれるだろうか？

なれないに決まっている。

それでも、そうするほかはない。

逆に、『こんなに仲よくなつたのだから、事件が解決しても、これまで通りプライベートでも親しくします』という自分もまた、主人公は支持しかねていたからだ。

だって、そんなの都合がよすぎる。あまりにも、イヴに甘えすぎている。

主人公、思う。

……だから、だったらまだ、『先生としてあるべき形に戻った方がいい』って思ったんだ。わたし、普通にイヴちゃんにいっぱい迷惑かけちゃったし、しょっちゅう泊めてもらって、ご飯作ってもらって、一緒に遊んでもらってたから。

イヴちゃんの事、なんだかすっかり友達とか、友達とはもっと違う関係の人のように思っちゃってたけど。

それってやっぱり、おかしいから。

おかしいから、おかしくない状態に、戻さなきゃいけないから。

「主人公が黙ってしまっているので、少し不安になっている。

なので、自分に言い聞かせるように言う。

『もう事件は解決したのだから、もう主人公に頼ったり、甘えたりしてはいけない』と、自分で自分を説得しようとしている」

……でも、とりあえずは安心していいのかな。

【本当は非常に残念。だから本当は『お迎えが終わりだなんて淋しい』『もっと先生と一緒に居たい』と言いたい。

だが、とてもそんな事は言えず、本音と逆の事を言ってしまう」
これで、お迎えももう大丈夫だね。

【こちらは本音。なので、余計に複雑な心境】

先生仕事で疲れてるのに、いつも来てもらうの、悪いなあって思ってたから」

〈主人公〉

「イヴちゃん……」

——イヴちゃん。それは違うよ。

わたしは、自分がそうしたくて、あなたと一緒に居たんだよ。

確かに最初は『自分だったら、こんな事があつたら不安だから。一人で対処するよりも、誰かが来てくれた方が嬉しいから』そう思って、迎えに行く事を提案した。そうする事であなたが安心できるなら、その相手はわたしじゃなくてもいいって思ってた。

……だけど、イヴちゃんがわたしを選んでくれたから。

『先生がいい。先生に来てほしい』って言ってくれたから。

わたしはそれが嬉しくて。だから、自分が疲れてるかどうかなんて、全然気にならなかったんだよ。

『自分が先生だから』じゃなくて、あなたを助けたいと思う一人の人間として、迎えに

来てたんだよ。

主人公、イヴとの間に誤解があると感じ、それを解こうと口を開く。
だが、そうする前に、イヴが再び話し始めた。

「【本音が漏れる。『この位であれば、言ってもいいだろう』と感じている】
あー。でもなんか降りたくないなあ。
私、先生の車好きだったの」

〈主人公〉

「そうなの……？」

主人公が泣きそうになりながら尋ねると、イヴが照れたように頷く。
それから、車をちらりと見渡して、その理由を述べた。

「うん。」

【照れつつも、素直な意見を述べる】
だってカッコいいじゃん、この車。

おしゃれな感じで、いい匂いして。

【少し間をあけてから。少し切なげに。

『先生っばい』は『好き』という意味で言っている】

……先生っばくて」

〈主人公〉

「……………」

主人公、『先生っばくて』が意味するところが分からないまま、次の言葉を待つ。けれど、その場が車内である必要はない。

ひとまず降車して、歩きながら聞いてもよかっただろう。

でも、話を終えるまで、主人公はここから動きたくなかった。

少なくとも、イヴが『降りよう』と言うまでは、一緒にいるこの時間を、引き延ばし続けたかった。

【大きく息を吸ってから。ぽつぽつと、ゆっくりと。

『言っても問題ない範囲の本音』を、すべて伝えようとする】

あのね。バイト終わって、近くにこの車が停まってる時。

『やっとな誰かに言えた』という感じで。

イヴは、本当はこの件をアルバイト仲間や友人に自慢したかったし、それが学校公認である以上、別に自慢しても問題ないとは思っていた。

だけど、誰かに自分達の関係を知られるのがもったいないような気もしていた。

『ひそかに気になっていた学校の先生が、生徒としての自分を気遣って迎えに来てくれる』事も、『同じマンションに住んでいる素敵なお姉さんが、個人的に一緒に過ごしてくれる』事も、どちらも、誰かに話したいけれど、誰にも話したくない位嬉しくて、秘密にしたい事だったからである』

ほんとはめっちゃ自慢したかった。

『私、先生が迎えに来てくれてるんだよ。私が一人暮らしな事心配して、先生と一緒にいてくれるんだよ』って。

【少し間をあけてから。少しだけ自嘲気味に。

だが、『ひそかに気になっていた学校の先生が、生徒としての自分を気遣って迎えに来てくれる』事はまだしも、『同じマンションに住んでいる素敵なお姉さんが、個人的に一緒に過ごしてくれる』事については、舞い上がりすぎてはいけない。勘違いしてはいけない。と思っっている。

イヴは『主人公はあくまで、成り行きで自分と一緒に居てくれただけ』と思っっている。なので『先生としての主人公』との関係に絞って話す』

ほら、昨日言ったじゃん。私、学校の先生とうまくいった事ないから。やっと気持ちに通じた気がしたっていうか。

【少し間をあけてから。自嘲気味に。】

イヴは『主人公は、元々個人的に自分と親しくするつもりはなかった。だけど、いつも自分が無理やり引き留めたり、交友関係を必死につなぎとめていたりしたから、仕方なく一緒に居てくれたのだ』と思っている」
「なんか舞い上がって、調子乗ってたなあ……」

〈主人公〉

「イヴちゃん。それは違うよ。それは」

主人公、慌ててその言葉を否定しようとする。

『舞い上がって、調子に乗っている』なんてありえない。

そんなの、主人公が自分自身に対して思っていた事だからだ。

そうだ。主人公は年上のくせに、先生のくせに、いつもイヴの優しさに甘えていた。

『イヴちゃんがそう言うならそうしよう』と、流されているフリをしながら、いつもそれが心地よかった。

叶うならこのままずっと、『先生』であり続けたまま『なんとなく押し切られて、いつも一緒に居る、同じマンションに住んでいる人』になりたかった。

だがそれは『先生であり続けたまま、先生の枠を超えていい思いをしたい』と言うのと同じだ。

そんなの、卑怯すぎはしないか。

仮にもし、本気でそうしたいと願うなら。

主人公は『先生らしくありたいから、本音は胸に秘めておく』なんて言っている場合ではない。

まずはイヴに対して、自分の本当の気持ちを伝えるべきではないか。

「あえて何でもないようなふりをして話を終わりにする。

主人公を困らせたくない。

イヴは『優しい主人公であれば、どれだけ自分が自嘲したところで、無理にでも否定してくれるだろう』と考えている」

とか言ってもしょうがないか。行こっか。

【無理に割り切ろうとする。

本当は非常に名残惜しいが、主人公の明日の仕事の事を思うと、いつまでもこうしている訳にはいかない】

先生、明日も早く行かなくやいけない日だもんね。
早く帰って、寝ないとね」

〈主人公〉

「……………。うん」

だが、そうする前に、イヴが話題を打ち切った。
それから『こんな事、話してしまった事自体が申し訳ない』とでも言うように、苦笑いをする。

そんな彼女に、主人公は何も言えなかった。

『しょうがないよ』『明日の事よりも、イヴちゃんの話が大事だよ』と、すぐに返事する事ができなかったのだ。

SE 4 イヴが車の扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

【トラック03で使ったのと同じ音】

そのままイヴは車の扉を開け、車内には冷たい空気が入り込む。

主人公はもう、これにない、家に戻る支度を始めるはかなかった。

SE5 主人公が車の扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

【SE4と同じ音】

▲1 ここでSE3がSE6と切り替わる。

SE6 外の環境音

【最初から最後まで流す】

▲2 で次の環境音と切り替わる】

SE7 イヴが車の扉を閉める音

【最初から最後まで流す】

SE8 主人公が車の扉を閉める音

【最初から最後まで流す】

【SE7と同じ音】

SE9 主人公が車をロックする音

【最初から最後まで流す】

SE10 二人の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【▲3でストップする】

二人、駐車場から、マンションの裏口に向かって歩き出す。

そして、これからマンションに入り、初めて話したロビークラウンジを通過して、エレベーターに乗って。別々に自宅のドアを開ければ、自分達はもうそれで終わりだ。

そうするだけで二人は元の『先生と生徒』に戻り、主人公は無事『先生らしさ』を取り戻せるだろう。

……でも、本当にそれでいいのだろうか？
本当にこのまま、終わってもいいのだろうか？

「震えて。予想以上に寒かったのだ」

うわ、寒。もう冬だね。

先生は……

「わかりやすく『本来言おうとした事とは別のことを言っている』という感じで。

本当は『先生お鍋好き？ 今度食べる？』と聞きたかった」

ちゃんと冬用の服とか、布団とか出した？

「※マークまで、ゆっくり、ぽつぽつと話す。

そこまで距離を取るつもりはなかったのだが、まるで、もう当分会えないかのような雰囲気になってしまう」

風邪引かないように気をつけてね。

ご飯もさ、簡単な奴教えたじゃん。ちゃんと自分で作って、食べるんだよ」※

〈主人公〉

「……うん。頑張る」

「うん。応援してるよ。」

【話題を変えようとするが、余計に淋しくなってしまう。】

毎日お弁当を作っている間に、イヴは主人公のお弁当箱と、自分のお弁当箱の予備

を交互に使っていた。

だから、今日が自分のお弁当箱を使う日であれば『お弁当箱を返してもらおう』という会
う理由ができたが、そうではなかった」

そうだ。お弁当箱は……ああ、今日月曜だから、先生の使う日だったね。
ゲームも、昨日持って帰ってたし。
じゃあ、返す物とかもないね」

〈主人公〉

「……そうだね」

SE11 自動ドアが開く音

【最初から最後まで流す】

SE12 マンションのオートロックを、カードキーで解除する音

【最初から最後まで流す】

SE13 マンションのオートロックを、カードキーで解除する音2

【最初から最後まで流す】

SE14 マンションの二つ目の自動ドアが開く音

【最初から最後まで流す】

【SE11と同じ音】

SE15 マンションを歩く足音

【最初から最後まで流す】

【▲4のセリフが終わるまで流す】

「泣きそうになるが、必死に隠そうとする」

▲4 はは。じゃあ、本当に今日で……」

▲4 ここでSE15がストップする。

二人、ドアの前で立ち止まる。

※ドア越しに、かすかに聞こえる

〈理沙・麻里〉

「ぎやはははは！」

〈主人公〉

「……………」

その時間こえたのは、もしかすると、主人公が作り出した、体のいい幻聴だったかもしれない。

〈主人公〉

「……待つて。誰かいない？」

【少し驚いて】

え？」

でも、主人公はこれを、心から『チャンスだ』と感じていた。

『ドア越しに人の声がする』

そう言えば、この先に進まなくてもよくなるかもしれない。

そんな些細な事が、今の状況を打破する、唯一の方法のように感じられたのだ。

〈主人公〉

「声がする」

だから主人公はイヴの腕を引いて、彼女を引き留める。

その時、イヴがなんだか嬉しそうな、なんだか期待するような目をしたのは、主人公の気のせいだろうか？

「少し嬉しそうに。」

『確かに声がするね』と言うよりは『もしドアの向こうに人がいるのなら、ここから進めないね』と言っているような感じで。

内心申し訳なく思いつつも、まるで、声がする事を『進まなくてもいい理由を見つけたラッキーチャンス』かのように思っているような感じで」

……あ、言われてみれば。何か声、するかも……。

ドア、ちよつとだけ開けて、覗いてみよつか」

〈主人公〉

「……うん。そうしょ」

SE16 イヴが鉄の扉を少しだけ開ける音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

主人公とイヴ、ドアを少しだけ開けて、ロビーラウンジを覗き込む。
すると、確かにそこには人がいた。
この声は現実のものだったようだ。

「先ほどまで、泣きそうになっていたところから持ち直して。

人が居る事に関しては、あまり驚いていない」

わ。ラウンジのそこ、誰かいるっぽいね」

そんなロビーラウンジには、十代後半と見られる、ジャージを着た二人の女性がいた。
二人とも、エレベーターに向かって歩きながら、一つのスマートフォン画面を、一緒にのぞき込んでいる。

※先ほどよりも近くなったものの、声は遠い

〈理沙〉

「興奮している。『動画ほんとに』の部分に特に力が入る。

牛が面白い事をするという、非常にお勧めの動画だったので」
ねえ？ 可愛いでしょ？ この動画ほんとにヤバイ」

〈麻里〉

「同じく興奮しているが、興奮すると声が低く、太くなるタイプ」
ヤバイ。この牛、天才すぎ。

「興奮のあまり、少し早口で。

『早速、友人グループのメンバーに共有しよう』と提案する」
これ、静（しずか）と奈緒（なお）にも送ってあげようよ」

ジャージのデザインから見ると、二人は逢瀬学園の生徒のようだ。

という事は、もしかして……。

と、主人公が思っていると、予想が的中したらしい。
イヴが早速教えてくれる。

「ここで、二人のうち一人が、先日話した『ガーデン逢瀬に住んでいる、もう一人の逢瀬学園の生徒』である事に気づく」

……あ。

【ひそひそと。

なので、こっそり耳打ちにするように伝える】

……先生。あの子だよ。

昨日話した、うちのマンションに住んでる、うちの学校の子。

【『それは二人いるうち、小柄な方である』と伝えたい】

二人いるうちの、ちっちゃい方の子。

こっからじゃ見えづらいけど。あのジャージ、三年の色でしょ？」

〈主人公〉

「……うん。間違いなさそうだね」

……ていうか……ここからじゃ顔もよく見えないけど……。
友達の名前が『静』と『奈緒』って事は、たぶん……！

主人公、これらの情報を受け、ラウンジにいるのは三年生の『珠川 理沙（たまかわりさ）』と『東野 麻里（ひがしの まり）』であると確信する。

麻里は女子バドミントン部に所属しており、たまに怪我をして保健室へやってくる事がある。

なので、声と、親しい友人の名前を聞いただけで、見当がついた。

一方理沙とは、ほとんど接した事がなかった。麻里、静、奈緒と親しいらしい事は把握していたが、理沙の顔だけがおぼろげな理解にとどまっていたのである。

だから、同じマンションに住んでいても、これまで気づかなかったのだろう。イヴと同じパターンである。

〈理沙〉

「【得意げに。『もちろんすでに送信済みです！』と言いたい】
もう送った！

【少し早口で。ここで急に話題を変える。

一見唐突に聞こえるが、理沙としては唐突ではない。

今日は麻里に借りた漫画を返すため学校に持っていくはずが、忘れてしまった。
なので、球技大会の練習の後、そのまま自分のマンションまで取りに来てもらっている。
だが、家庭の事情で家に入ってもらえない。

「これらが非常に申し訳ない」
つか来てもらってごめんね？ 漫画忘れたのこっちなのに」

〈麻里〉

「『いいっていいって』を強調して。
全く気にしていない。」

麻里は今日、たくさん身体を動かしてさっぱりとしており、とても晴れやかな気分。
『理沙のマンション初めて』は『理沙のマンションには初めて入った』という意味！
いいっていいって。通り道だし。
普段うちで遊んでるから、理沙のマンション初めてで新鮮！」

〈理沙〉

「『『どんどん』を強調して。」

『今日は無理だけれど、今後はぜひ遊びに来てほしい！』という気持ちを伝えたい！
これからはどんどん来てよ！

【少し間をあけてから。ラウンジのソファを指さして発言している】
じゃあごめんね。ここ座って待っててくれる？

【『お父さん寝てなかったら』をやや強調して。とても申し訳なさそうに】

お父さん寝てなかったらあがってもらってただけどさ」

〈麻里〉

「『いーって！』を強調して。

本当に気にしていない。むしろ、さほど悪い事をしたわけでもない理沙が、ひたすら謝り続けている事の方が申し訳ない」

いーって！ 理沙のお父さん忙しいんだから。行っってらっしゃい！」

〈主人公〉

「……………」

SE17 理沙の足音

【最初から流す】

【5秒ほどかけてフェードアウトする】

【最初から遠い位置に居るのが、完全に聞こえなくなる】

【SE15と同じ音】

こうして理沙は去り、麻里だけがロビーラウンジに残った。

そんな彼女は鼻歌を歌いながらスマートフォンをいじっており、主人公とイヴが通過しても、なんら問題なさそうだ。

しかし、イヴはこれをどう捉えているだろう。

主人公がそんな事を考えていると、イヴが状況を整理してくれた。

「……なるほど。」

【麻里を指して言っている】

もう一人の子。

【先ほどの会話から、同じマンションに住んでいる人物が『理沙』という三年生であると理解した】

理沙（りさ）さん？　が来るまで、あそこのソファで待つてるみたいだね。

【自分達の関係は、現状そこまでやましくない。

変質者の件は逢瀬学園の生徒なら誰でも知っているし、むしろ堂々と麻里に近づいて行って挨拶をし、正直に説明すれば、特に問題ないように感じている】

一緒に通っても、別に大丈夫だと思うけど……」

【少し間をあけてから。

だが、わざわざ説明するのは骨が折れるだろうと感じる。

本当は『しばらくここで待つてようか』と言いたいが、万が一にでも主人公に迷惑をか

けたくない」

説明するの面倒だよね」

だから主人公は、この言葉に同意して『そうだね。このまましばらく様子を見て、二人がいなくなってから移動しようよ』と提案しようとした。

きつとイヴも、同じように考えてくれているのではないか。

そんな期待があったからだ。

だけどイヴはどこか悲しげな表情になると、先ほどのように、自嘲気味に微笑んだ。

「さらっと言う。

一見なんでもなさそうにしているが、本心に反した提案である」
時間差で行こっか。

【その結果、この寒い場所にしばらく残される主人公を気遣って】

先生は一回車戻って、しばらく隠れてて。ここに居たら寒いでしょ」

〈主人公〉

「えっ？」

主人公、言葉を失う。

イヴの提案がショックで、反論するタイミングを逃してしまったのだ。確かに、イヴの言う通りにすれば安全だ。

主人公はイヴと別れ、多少帰宅時間を遅くするだけで、面倒な説明からも、あらぬ誤解からも逃れられるだろう。

だけど、それらの両方から逃げるとするのは、どういう事か。

まず、面倒な説明を避けるという事は、先生としての義務を放棄するという事だ。

仮に主人公が『先生として堂々としていたい』と願うなら、主人公はイヴと一緒に、麻里に挨拶するべきである。

これに対して、イヴとの関係を『あらぬ誤解』と呼ぶのは、自分の気持ちを否定するという事だ。

仮に主人公が、イヴを生徒以上に大切に想っているのなら『変な誤解をされたくないから、イヴとは別々に行動しよう』なんて考えるのは、卑怯が過ぎる。

——だから主人公は、今、どちらかを選ぶべきだ。

本音を言えば、主人公は先生として完璧な行動をとりながら、イヴと好きなだけ親しくしたかった。

だけどそれができないのなら、自分が一番したい事をしよう。

理想の自分になれないなら、せめて『なりたくない自分』になるのだけは、避けよう。そう思ったのだ。

「平気そうに振る舞う。でも本当は泣きそう。とても離れたい」
じゃあ、無事に家（いえ）入（はい）れたら連絡するから。

「少し間をあけてから。
少し泣きそうになるが、なんとかこらえようとしたので間があいた」
先生、今日までありがとう。

「心から言う」
ほんとに楽しかった。

「だが、ここまで決意したにもかかわらず、自分から立ち去る事がどうしてもできない。
なので『行くね』ではなく『行つて』と言ってしまふ」
……行つて」

〈主人公〉

「……………」

だから主人公は、イヴの提案を拒否した。

ただ動かない事で、自分の意思を伝える事にした。

7秒ほど沈黙。

「不思議そうに。なぜ、主人公が車に戻らないのかわからない。

『行っているんだよ?』と促すような感じで」

先生?」

〈主人公〉

「……………」

「少し間をあけてから。少し困惑して。だが、本当は嬉しい。

『え? 何で戻らないの?』と思いつつ『このままここに居てほしい』とも思っている」

あの。先生。車戻っているよ?」

【だが、この場所が寒い事だけは心配】

ここ、寒くない?」

主人公、大きく息を吸い、とうとう口を開く。

ここからの自分は、もう『先生』でも、『イヴと同じマンションの人』でもなくて『好きなように、思ったままの行動をする人』だ。

そう、決意が固まった。

〈主人公〉

「……寒いけど。

寒くても、ここで待つてようかなって。

イヴちゃんを、ここから見送ろうかなって」

「【ぽかんとして。予想もつかない答えだったので】

……え？

【予想外のリアクションに驚くが、嬉しい。

口では『ダメ』と言いつつも、本当はもつと一緒に居たいし、それがあからさまである】
ここで待つてるの？

【少し間をあけてから】

私の事、お見送りしてくれるの？

【嬉しくて、すでに泣きそう】

だ。ダメだよ。それは私がやる。

【だが、やはりいけないと感じる】

私、先生がちゃんと隠れられたか確認してから、行こうと思ってたんだから。

【また、思いに反する行動をとってしまう】

ほら、行きなよ」

〈主人公〉

「ううん。居る。イヴちゃんを見送るまでは動かない」

主人公、きっぱりと言い切って、イヴを見つめる。

それから、思う。

イヴちゃんは今、こんなわたしの事を、どう思ってるんだろう。

『前から変な人だったけど、今日はいつもに増して妙な事を言い出すな』なんて考えているのかもしれない。

……でも、それでもいいや。

とにかく、『じゃあ、あとはよろしく』なんて言って、自分だけ安全な所へ逃げるなんてありえない。

わたしはイヴちゃんと一緒にいたい。

イヴちゃんを淋しくさせたり、不安にさせたりする人にだけはなりたくないんだ。

と。

「ものすごく嬉しい。主人公がきっぱりと言い切ったので」

あ……」

しかし、主人公の予想は外れたようだ。

イヴは潤んだ目を見開くと、恥ずかしそうに口を結んで、でも、大きく頷く。それから主人公を見て、こう言った。

「少し声が震えている。恥ずかしくて、ドキドキしている。

主人公がそのように言ってくれるのであれば、自分も、もう少しだけ素直になっていいのではないかと思っている」

……じゃあ、私もここに居よつかな。

「一応『ここに居ても大丈夫そうな根拠』を述べるが、これがあくまで推測でしかない事は、イヴ自身もわかっている」

通り道って言ってたし、多分あの二人、正面玄関から入ってきてるから。

駐車場側には、来なさそうだし。

【少し間をあけてから。かなりドキドキしている】
一緒に、待ってよっか」

〈主人公〉

「うん。それがいいよ。

そうしよう？　だってわたし、まだイヴちゃんと離れたくないもん」

主人公がさらに言いきると、イヴの瞳が揺れる。

それを見て主人公は、自分の選択が間違っていなかったと確信した。

今日自分は『良い先生』とは言えない存在になってしまったが……それでもイヴと一緒に居たいと伝えられて、良かったと思った。

「【泣きそうなほど嬉しい】

あ……♡

【とても嬉しくて、素直になってもいいのだと感じ始める】
へへ。そっか。……私も。まだ、バイバイしたくない。

【※マークのセリフ終わりまで、ゆっくりと、少しからかうように。

また、思いに反する事を言ってしまう。

「こうは言っているが、本当は絶対、主人公と離れたくない」
でも、いいの？　これ。先生として。

堂々と出ていくなまだしもさ。

二人で隠れてるの見つかったら、ヤバくない？」※

〈主人公〉

「うん。ご指摘の通り。」

万が一見つかったら、堂々としてるよりも、はるかにやばい感じはするね」

主人公、そうは言いつつも、すでに覚悟を決めていた。

たとえ『はるかにやばい感じ』になったとして、自分が全部責任を取ると、『好きなように、思ったままの行動をする人』になるというのは、そう言う事だからだ。

しかし、イヴは途端に不安げだ。

先ほどは『一緒に居たい』と言ってくれたのに、急に申し訳なさそうにする。

「これからかっている風でありつつも、少し焦ってくる。」

最初はからかい半分、冗談半分のつもりで言っていた。

だが『確かにそうだ』と気づき、少し不安になってきた』
ほら。ダメじゃん。やっぱ戻ってなよ。

【もっもごと小さな声で、切なげに。

本当は先生らしくなんかしてほしくない。

先生らしさよりも、自分と一緒に居る事を優先してほしい」

先生は……先生なんだからさ。

ちゃんと。先生らしく、してないと……」

……あー、そっか。そういう事だったのか。

だけど、主人公はイヴの言葉を聞いて、理解する。

これまで主人公は、イヴの事を、素直で押しの強い子だと思っていた。

だから『彼女の発言は、言葉のまま受け止めるのが正しい』と。

でも同時に、イヴは人に迷惑をかける事を恐れ、気を遣うあまり、本当の気持ちを伝えられない子でもあった。

……じゃあ、そんな彼女が、今隠している本音があるとして。

主人公はそれを、最大限都合よく解釈する事にした。

〈主人公〉

「んー。……でもね。

したくないのに『先生らしくしよう』ってするのは、もうやめようと思って」

「【思わず期待してしまう】

え……？」

——ごめんね、イヴちゃん。

いつもわたし、あなたに甘えてばかりで。

あなたが優しくしてくれるからって、いつも流されてばかりで。

でも、今だけは『そうかも』『イヴちゃんの言う通り、先生らしくする』なんて、絶対に言えない。

ほんとに勝手だけど、わたし、先生らしく居る事より、あなたの事の方が大切なんだ。

もし、わたしがなりたい自分があるとしたら。

それは『あなたと誠実に付き合う人』なんだ。

主人公、もう一度イヴの腕に触れ、そのまま、自分の方へと引き寄せる。
それから……。

SE18 主人公がイヴを抱きしめる音

【最初から最後まで流す】

【少し大きめの音量で流す】

イヴの事を、正面から、ぎゅっと抱きしめた。

「抱きしめられて。ものすごく嬉しい」

あ……♡」

〈主人公〉

「イヴちゃん、わたし、あなたが好きです。

あなたの事、お嫁さんにしたいって意味で、大好きなの。

だからもう、先生らしくなれなくていいよ。

ここでイヴちゃん置いて戻るのが『先生っぽい事』なら、わたし、先生らしくなくていい。

……あなたと、ここに居る」

「息づかいのみで表現する。嬉しくて泣きそう」

……！

【少し間をあけてから。泣きそうな声で。ものすごく嬉しい】

先生……♡

【少し間をあけてから。甘く優しく。

『やだなの？』は『嫌なの？』という意味。

嬉しいのに、まだ信じられなくて、母親が子どもと話すような口調になってしまおう
やだなの？ ダメでも離れたくないの？

私と一緒に居たいの？

【少し間をあけてから。大きく息を吸って。ほとんど泣いている】
もう。困った先生だな」

〈主人公〉

「まったくだ。ごめんね。ほんとに、いつも格好つかなくて」

主人公、指摘され、思わず笑ってしまう。

……本当にわたしと来たら、どうしようもないやつだ。

好きな子と離れたくなくて、めっちゃくちな事ばかりしてる。

そんなわたしを、イヴちゃんは許してくれるかな。

『困った先生だな』って言って、受け止めてくれるかな。

そう思っていると……イヴが、ゆっくりと口を開いた。

「息づかいだけで表現する。大きく息を吸う」

……。

「涙ぐんで、嬉しそうに。想いがあふれ、とうとう本音を伝える」

私も、離れたくない……♡」

〈主人公〉

「……………！」

「涙ぐみながら。もう、自分の気持ちを隠さなくなる」

ふふ。ありがとう。ここに居るって言うてくれて。

「少し間をあけてから。冗談めかして言うが、本当にそうになっていたんだろうと考えている」

ほんとだね。先生が居なくなっちゃってたら、私きつと淋しくて泣いてた。

きつと家（うち）帰った後も、泣きながら寝てたよ」

主人公、想いが通じた事を確信し、泣きそうになる。

だが、すぐにそうしている暇はないと気づき、慌てて返す。

『そんなの、自分だって同じだ』と『ここでさよならするなんて耐えられなかった』と、とにかく自分も同じ気持ちでいた事を知らせたかったのだ。

〈主人公〉

「わたしだってイヴちゃんがあのまま帰っちゃってたら、淋しくて泣いてたよ。

ここでさよならなんてダメだよ。

わたし達、これからの約束、まだ、何にもしてないんだから」

「嬉しくてたまらない。

つまりそれは『主人公は、イヴとこれからの約束をしたいと思ってくれている』という事であると理解する」

あ………

【噛みしめるように。』『。』ごとに区切ってゆっくりと。

それとともに、先ほど主人公に相談せず、一方的に去ろうとしていた事が申し訳なくなくなり、謝罪する」

うん。そうだね。ここでさよならなんて、おかしかったよね。ごめんね。一人で勝手に決めようとして。

『それがいい』って思いそうになっただけど、間違ってた。

【少し間をあげてから。もう隠さず、素直にはっきり言う】

あのね。知ってると思うけど。私も先生の事大好き。

先生の時の先生も、先生じゃない時の先生も、どっちも大好き。

【少し間をあげてから。ずっと伝えたかった事を、勇気を出して口にする】
ほんとはずっと、こんな風に先生にハグしてほしかったの」

〈主人公〉

「するよ。いくらでもするよ。これから、毎日だってしてあげる。

イヴちゃんが『もう、鬱陶しい』って言ったって、離さないんだから」

主人公、イヴをぎゅううつと抱きしめながら、何度もうなずく。

すると、イヴが少しでも身体を離し、主人公を見上げる。

その顔は涙でぐずぐずになっているくせに、どこか得意げで、勝ち誇ったような様子だ。一瞬、一体何に……？　と思うが、鈍い主人公でも、すぐに気づく。

そうだ。イヴはそういう子だった。

油断すると、すぐに言質を取ってくるのだ。

「ここから※マークのセリフ終わりまで『。』ごとにゆっくりと区切って話す。

ぐすぐすと、泣きながら、甘えた口調で。

もう気持ちを隠さなくて良くなったので、たくさん甘える。

『言ったな』が『ゆっただな』になる」

本当？ ゆっただな？ これからほんとに、毎日してもらうんだから。

【少し間をあけてから。さらに甘えて。

主人公が『毎日抱きしめてあげる』と言ってくれた事が嬉しくて、際限なく甘えてしま
う」

あのね。

【少し間をあけてから】

そしたらね。

【少し間をあけてから。『絶対』を強調して。

ここでまたぎゅっと抱きついて、顔を主人公に密着させながら言っているイメージで】
私からはハグ、絶対解かないから。

【こう言っても、主人公が離れていけない事をわかっていて言っている】

……離れるなら、先生からにしてね？」

そう来たか。

こうなったら、わたしだって譲らない。徹底的に勝負してあげよう。

〈主人公〉

「やだよ。わたしも同じ。自分からは絶対離さない」

主人公、応戦するつもりで、さらにイヴに密着する。

それは、はたからすれば、見ていて、聞いていて恥ずかしくなるような二人だったが……。

まるで、お互いをどれだけ好きなのか主張し合っているようで、主人公はとても幸せな気持ちになった。

「甘えた声で、嬉しそうに。

想像通りのリアクションが得られて、たまらなく嬉しい」

先生もずっと離さないの？

【少しも困っていない口調で】

困ったな。じゃあ、ずっとこのままじゃん……♡」

〈主人公〉

「そうだよ。ずっとこうしてよう？」

寒くなってきたらさ、こうやって、くつついたまま移動しようよ」

主人公の無茶な提案に、イヴが笑う。

そんなの到底不可能だとわかっていながら、のってくる。

「泣きそうになりながら笑う」

あはは。そうだね。

「声は笑っているが、ほとんど泣いてしまい、鼻をすする」

ぐすつ。じゃあ、抱き合ったままマンション入って、抱き合ったままうち帰って、そのまま寝ちやおうか。

「少し間をあけてから。本人としては真剣な決意表明のつもりで。

イヴはここまでしたのにまだ自信が持てず、おかしな事を言い出している。

だが、イヴとしては、本気でこうするべきだと思っている」

あのね。私、ちゃんと頑張るから。

私達の事誰にも言わないし、先生に迷惑かけないようにするから。

これまで通りに一緒に居られたら、他は何にもなくていいから。

『私』と続けようとするが、主人公にさえぎられる」
わた……」

〈主人公〉

「イヴちゃん。それはダメだよ」

だがここで、またイヴがおかしな事を言った。

これには、さすがの主人公も、むうつ。となる。

せつかくここまでいい雰囲気になったのに、この期に及んで、この子は何を遠慮しているのか。

まったく、この子はわかっていない。

ちよつとここでひとつ、はつきりさせておく必要がある。

と思った。

「きよんととして。何が『ダメ』なのかわからない」

え？

【※1回※ だけ唇にキスされる。

『何がダメなの？』と尋ねる間もなく、キスされる。

唇を重ねるだけだが、完全に不意打ちのキス」

ん……♡

【そのまま、唇を舐められて、驚く】

ん……！

【※3回※ キスされる。

驚いた隙に、一方的にちゅっ、ちゅっ、ちゅっ。っと繰り返される】

ん。う。んっ……♡

【息づかいだけで表現する。

はあはあと甘い息を吐いて、呼吸を整える。

激しい訳でも、長い訳でもないキスだったが、初めてだったので、ものすごく興奮し、ドキドキしている】

はあ、はあ、はあ……♡

【少し間をあけてから。やっと話せるようになる。

甘ったるく抗議する。少しも怒ってない。

また、キスされた事により、主人公に『遠慮する必要はない。もっと欲しがっていい』

と言われている事を理解する」

もう。他にはなくていいって、言ったのに。

【少し間をあけてから。

つまり『もっとキスしてほしいし、今後キスよりもすごい事もしたい』と言っている」
こんな事されたら、私、もっと一杯ほしくなっちゃうよ」

〈主人公〉

「いいよ。イヴちゃんはね、これからいくらでも欲しがっていいの。
だって、わたしの彼女なんだから」

主人公、まだ遠慮がちにしているイヴに、きっぱり宣言する。

実際どれくらい欲しがられるかは検討もつかなかったが……それでも、思いっきり欲しがってほしかった。

それはまず、主人公がイヴを欲しいからだ。

こうなったからには、我慢できる保証もない。

イヴが心からそう望むなら、一緒に我慢しても良い。

でも、そうするうちにを失うものがあるかもしれない。

それなら、最初から無理なんてせずに、今の気持ちに忠実な方がいいと思ったのだ。

「泣きそうなほど嬉しい。

そういう意図で主人公がキスしてくれた事はすでに理解していた。

それでも、はつきり口にしてもらおうとますます嬉しくて、泣きそうになる」

あ……♡」

〈主人公〉

「……確かにわたしと居る事で、イヴちゃんに我慢させる事もあるかもしれない。というか、させると思う。

他にも、普通の恋人同士みたいに、外で堂々と会えるようになるまでには時間がかかると思う。

……でも、だからこそ、それ以外の事では我慢してほしくないっていうか。できる限りイヴちゃんの希望に応えたい。

……というか、わたしは我慢、しないとと思うし。

イヴちゃんと、キスとか、キスじゃない事も、したいと思ってる」

迷惑をかけるとわかっているのに『それでもいい?』と聞く気はなかった。

ここで自分がまごまごしては、できる事も出来なくなると思ったし……今更、自信

がないふりをするのもやめようと思った。

イヴは自分を好きでいてくれている。自分の言葉を待っていてくれている。そう信じて、もっとはつきり態度で示すべきだと思った。

主人公、もう一度、イヴの唇にキスをする。

「※1回※ 軽くキスされる」

ん♥

「少し間をあけてから。甘えた声で」

欲しがっていいの？

「少し間をあけてから。泣きそうになりながら、本音を打ち明ける」
だったらね、さっきのは嘘。

「長めに間をあけてから。勇気を出して言う」

本当は思いつく事、全部したい……♥

「※4回※ 水気の多い、長めのキスをされる。

さっきよりもキスされるのに慣れて、うまく受けられるようになる。

また、このキスが『いいよ。思いつく事、全部しよう』という意味だと理解している」
ん……ちゅ、ちゅ♥ ちゅっ♥

【息遣いだけで表現する。甘ったるく、息をつく】

はあ……♡

【嬉しそうに。

まるで『誰にも言えない』事が、とても嬉しくて素晴らしい事のような感じで
あのね。嬉しい。私、誰にも言えない事してるのに、嬉しいよ。

【※マークのセリフ終わりまで、甘々に。少しも悪びれずに】
ごめんね。ダメな生徒で。

【少し間をあけてから】

先生の事、もっと欲しい……♡」※

〈主人公〉

「じゃあ、もっとしちやおうよ」

主人公、イヴの耳を撫でながらささやく。

まったく、こんなの悪魔のささやきだ。

悪い事だとわかってるのに、積極的に『そうしろ』と促している。

こんなの絶対、先生がやる事じゃない。

でも、そうしたかった。

自分はよい先生にはなれなかったが、イヴの全部を受け入れる恋人にはなりたいたいと思ったのだ。

【※1回※】 キスする。水気多めのキスをされる】

ん……♡

【甘えた声で】

うん。私のもっとしたい。

【ひとときわ甘々に】

もっとする……♡

【※3回※】 キスする。今度は舌を入れて深く、たつぷりとキスする。

3回目にあたる『んんう……♡』を、少しえっちな感じで】

ん♡ ん♡ んんう……♡

【※3回※】 ゆっくりと呼吸する。

とろとろの、少しえっちな呼吸になる】

はあ、はあ、はあ……♡

【照れ笑いして。自分でも、えっちな声が出てしまった自覚がある】

ふふふ。もう、何回キスしたかわかんなくなっちゃった。

【※1回※】 今度は、自分から、軽く1回だけキスする】

ちゅ♡」

もう何度目なのか、主人公もとつくにわからないほどのキスをして、イヴが微笑む。悪い先生と悪い生徒の二人は、もう、なぜ自分達がここから動かず、何から身を隠しているのかも忘れている。

このままだと、本当にずっと抱き合ったまま家に入りそうな雰囲気だ。まだ月曜日なのに、明日も早いのに、明日の事なんかどうでもいい。まだまだここで、両想いの甘い喜びに浸っていたい。そんな愚かな事を考えながら、ここに隠れている。

「とびつきり甘えた声で。

つい先ほどのまでの、『生徒』だった頃とは違う『恋人』として甘えているイメージで」※特に聞き手をドキツとさせるイメージでお願いします

……先生。大好き。私と居てくれてありがとう。これからも。ずっとそばにいてね……。

【※1回※ 自分からキスする。甘ったるい、ちゅぱつとしたキス。

先ほどのセリフでトラック終了に見せかけて、今度は自分から不意打ちのキスをする」ちゅ♡」

ここでフェードアウトして終了。